



2017
秋号

Fun with

ENGLISH

～英語教育 環境づくりのヒント～

KEIRINKAN



巻頭特集

小学校英語開始に向けて ～聞くことの重要性～

町田 智久 (国際教養大学専門職大学院 准教授)

学習指導要領の改訂を受け、小学校英語の先行実施に向けた準備を始めた学校もあると思います。高学年では、「読み」「書き」も含めた4技能の指導が求められているため、その指導の内容や方法に不安を感じている先生方もいるかも知れません。しかし、新しい学習指導要領の中で「読み」「書き」については、高度な内容は求められていません。「読むこと」に関しては文字の識別が中心ですし、「書くこと」に関しても大文字と小文字の書き分けができれば大丈夫です。それ以外については、「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現」を読んだり書いたりすることが求められています⁽¹⁾。つまり、「読み」「書き」についても、「聞く」「話す」能力をしっかりと育てることが土台です。その中でも特に「聞くこと」の重要性について、今回は考えていきます。

「聞くこと」は、英語を初めて学ぶ小学生にとって最も大切な技能です。英語を学び始めた段階では、当然ながら英語を読んだり書いたり話したりすることはできません。「聞くこと」を通して、新しい語彙や表現に親しみます。ちょうど、赤ちゃんが言葉を覚える際に、親が色々なことを赤ちゃんに語りかけて、物の名前や表現を聞かせることに似ています。もちろん、母語習得と第二言語習得は必ずしも同じ過程を経るわけではありませんが、共通する部分も多くあります。小学生も英語を学習する際に、英語の音や語彙・表現など様々な情報を受け取ります(専門用語では「インプット」と言います)。多くの研究者が述べているように、インプットは言語習得を促進し、ひいては発話などのアウトプットにつながります⁽²⁾。そのためインプットをいかに効果的に、そして多く与えられるかが、子どもたちの英語能力を伸ばす上で重要になります。今まで多くの外国語活動の授業を参観してきましたが、残念ながらこのインプットの重要性を意識した授業は多くありませんでした。インプットの視点に欠けた単なるゲームの連続であったり、十分なインプットを行わずに、すぐに発話活動に移ってしまったりする授業がありました。そのため、今後の小学校英語においては、いかに効果的にそして多くのインプットを与えられるかが、授業を組み立てる際の鍵になります。何を聞かせるのか、そしてどのように聞かせるのかを、具体例を示しながら述べていきます。

1. 何を聞かせるのか

新しい学習指導要領の「聞くこと」の目標を見てみると、「自分のこと」や「日常生活に関する身近で簡単な事柄」を聞き取ることが求められています⁽¹⁾。つまり、聞くべき対象は子どもたち自身の情報に関すること(例: My name is Ken. / I can swim. など)や、子どもたちの日常生活(学校や家庭、友達など)を題材としたこと(Do you have an eraser? / My sister is dancing. など)です。身近な話題を題材とすることで、英語学習が子どもたちにとって「より意味があり、やる気を起こし、有益なものになる」と研究者は述べています⁽³⁾。誰しも、興味のないことより、自分の知っている事柄や場面が話題になれば興味を持つものです。そのため、指導する語彙や表現が子どもたちの日常生活でどのように使われているかを考え、導入することが大切です。例えば、子どもたちが学校生活で楽しみにしているのは「1位: 休み時間(65.3%)、2位: 友達と話している時間(52.8%)、3位: 給食の時間(46.1%)」⁽⁴⁾です。そのため、休み時間にする活動(例: reading books / playing dodgeball など)を提示したり、給食の時に使う食器や食材(chopsticks / carrots など)や好き嫌い(I like milk.)を表したりするなど、身近な表現を聞かせることが重要です。英語指導のための語彙・表現ではなく、子どもたちが自分や身近なことを言い表すためという視点を持って語彙・表現を指導します。なるべく子どもたちの日常生活に沿った題材を選び、興味・関心を刺激して下さい。

2. どのように聞かせるのか

① i+1 (アイプラスワン)

まず難易度に関しては、多くの研究者が主張する「i+1 (子どもたちのレベルよりちょっと上)」のものが最適です⁽⁵⁾。「理解可能なインプット」と言われています。分からない語彙や表現はありますが、知っている語彙や表現から推測して全体の内容が大体分かるというものです。簡単過ぎると飽きますし、逆に難し過ぎると聞く気が起きません。例えば、担任の先生が黒板にハートマークと共に「I ♥ books.」と書きます。お

気に入りの本を見せながら、「I love books. I love reading books. Do you like books? I go to a library every day. Look at this book. This is a story about frogs. They are friends.」と質問しながら話します。子どもたちは、ハートマークは大好きだと分かりますし、bookやfriendという単語は日本語でも使われることも多いです。また、実際に本が提示されるので、先生は本の話をしているのだろうと予測できます。次にfrogsは本の表紙に絵が描かれていることも多いので、見て分かります。ただ、a story about…やreading, go to a libraryなどの表現は分からないかも知れません。しかし、全体として本に関する話をしていて、読書が好きなのだろうと分かっただけでも大成功です。

英語は外国語ですので、全てを理解することは大変難しいですし、完璧に理解しようとすると苦しくなります。曖昧さを受け入れ、「何となくこんな感じかな」というくらいの理解で十分です。単語や表現は一度きりしか出てこないわけではありません。インプットを通して何度も出会う中で徐々に意味を理解し、習得につなげることが大切です。子どもたちが、興味・関心を持ち続けられる「i+1」のインプットを心がけて下さい。

② トップダウン vs. ボトムアップ

次は指導の方法についてです。ここでは、先程の例を題材にして、2つの指導方法(トップダウンとボトムアップ)について見ていきます。先生方が学生時代に英語を学んだ時には、まず単語の意味から確認して内容を理解したと思います。それは細部から全体へと理解していくボトムアップと呼ばれる方法ですが、まずは全体像から理解するトップダウンでの指導から始めます。これは、学習者が既に持っている経験や知識など(「スキーマ」と呼ばれます)を活用する方法です。例えば、本を見せながら「What's this?」と聞きます。多分、「本(またはbook)」という答えが返ってくるはずです。そこで「Where do you read books? What books do you like?」と質問します。子どもたちは読書の経験がありますし、図書館や学校の図書室にも行ったことがあります。読書に関する経験を日本語で自

PROFILE

町田 智久 まちだ ともひさ (国際教養大学専門職大学院 准教授)

1970年東京都生まれ。米国イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校大学院修士課程修了(英語教授法専攻)。同博士課程修了(初等教育専攻)。東京都の公立中学校に英語教諭として12年勤務後、退職し留学。帰国後、国際教養大学EAPプログラム講師を経て現職。

『Teacher Education and Professional Development in TESOL』(第11章: Routledge)、『Keirinkan Science Readers』(啓林館)など。

由に語ると思います。子どもたちの読書に関するスキーマを活性化させた後で、一旦先程の本の紹介をします。知らない語彙や表現も含まれていますので、全ては分からないと思います。ここでボトムアップを使います。例えば語彙(story, reading, libraryなど)であれば、その単語の意味を表す絵や写真を示します。本を読んでいる子どもの写真を見せながら、「Look at this picture. He's reading. Reading a book.」と解説します。いくつか単語の導入をしたら、教師の後について絵や写真を指差して発音するPoint and Sayの活動で単語を確認させます。そして再度、本の紹介を聞かせます。この段階では、もう大分内容も理解しているはずですが、「聞く」活動は、単に何か英語を聞くだけではありません。聞く前に行う活動(スキーマ活性化)、聞きながら行う活動(単語や表現の確認)、聞いた後に行う活動(内容把握)など、トップダウンとボトムアップを組み合わせて「積極的に聞く」ことで、子どもたちは聞く力を伸ばすことができるのです。

③聞き取れているかの確認方法

次は、子どもたちが正しく聞き取れているかを確認します。その際に次の3つのステップを経て、確認するのが良いと思います。

I : インプット+目視

II : インプット+TPR (全身反応)

III : インプット+口頭反応

春夏号でも書きましたが、子どもたちが不安を感じずに英語を発話できる環境づくりが大切です。そのため、まずは聞き取れているかを先生方が目視で確認します。先生方は毎日子どもたちと接する中で、英語を理解しているかどうかは子どもたちの様子を見れば分かると思います。まずは質問をせずに、目視で様子の確認から始めます。次は、TPRといわれる全身反応を使った確認方法です。例えば、先生が「What do I

like?」と質問します。子どもたちは口頭で返答する代わりに、本とカエルの描かれた紙から、自分が正しいと思う方をマルで囲みます。または、先生が「Books? Frogs?」と発音するのを聞いて、どちらかに手を挙げます。こうすることで、人前で英語を話す恥ずかしさを避けて答えられます。そして正しく聞いているという自信を少しずつ持ち始めたら、初めて口頭反応を求めます。それでも最初のごく短い、1語か2語程度の口頭反応です。例えば「Where do I go every day?」という質問には「Library.」など、単語レベルで答えます。そして、段々口頭反応に慣れてきたら、「You go to a library.」と文章で答えさせます。

3. まとめ

これまでの外国語活動の授業では、十分に聞かせることなく、すぐに子どもたちに発話を求める授業も多かったと思います。話させる前には、まずは十分に聞かせることが大切です。子どもたちの身近な題材を使い、トップダウンやボトムアップの指導方法を使いながら「i+1」のインプットを心がけ、全身反応から徐々に口頭反応へ移る工夫をして下さい。

【引用・参考文献】

- (1) 文部科学省. (2017). 小学校学習指導要領 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm.
- (2) 村野井仁. (2006). 第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法. 大修館.
- (3) Shin, J. K., & Crandall, J. A. (2014). Teaching young learners English. National Geographic Learning.
- (4) 学研総合教育研究所. (2015). 小学生の生活・学習・人間関係等に関する調査 <http://www.gakken.co.jp/kyouikusuouken/whitepaper/201510/index.html>.
- (5) Krashen, S. D. (1985). The input hypothesis: Issues and implications. Longman.

コミュニケーションをしかける授業づくり

～『スイカわりゲーム』を通して～

佐藤 裕子 (船橋市立若松小学校教諭)

1. はじめに

2020年の東京オリンピック開催とともに、小学校英語教科化が近づきつつあります。今こそ国際化の中で、コミュニケーション手段としての英語の重要性が高まっています。英語を通して小学校から外国の人々や外国の文化に慣れ親しむことで、外国の人ともっと仲良くなりたい、伝え合いたいという気持ちを育てていけると考えます。ここでは、コミュニケーションの必然性を高める授業づくりについて紹介します。

2. 方向の学習で

子ども達は、日常生活において道や場所をたずねたり、教えたりする体験をしています。その時に「右へ」「左へ」「まっすぐ前へ」などの方向に関連する言葉を自然な形で使用しています。しかし、英語学習で「方向の言葉を覚える」というのは、なかなか日常生活と同じ場面設定をして動機付けをすることが難しいでしょう。必要感なしに方向の言葉を学習することは、進んで話したいという意欲を持たせにくいと考えます。

そこで、子ども達の意欲を高めるために多くの子どもが知っている『スイカわりゲーム』を題材に取り上げました。『スイカわりゲーム』は、指示する側も指示される側も正しく英語を話したり、聞き取ったりしないとスイカを割ることができないゲームです。遊びの中で友達と協力しながら、「右」「左」「進め」「下がれ」などの英語を必死に使ったり聞いたりする必然性を生み出すと考えます。

3. 目標を定めて指導計画を立てる

『スイカわりゲーム』を通して、ALTや友達と英語を使って積極的にコミュニケーションを図ることができ

る」と目標を定めたら、目標達成のための指導計画を立てます。指導時数は3時間扱いとし、第1次・第2次は、「方向を指示する言葉を知る、言い方に慣れる」とし、指示する言葉をジェスチャーを使って慣れ親しむようにしていきます。ここで大事なことは、繰り返し練習し体で覚えることです。指示する言葉があやふやだと、思っていることが伝わらず、ゲームを楽しむことができないからです。第3次は、「方向を指示する言葉を使いながら、『スイカわりゲーム』を楽しむ」とします。

4. 『スイカわりゲーム』にチャレンジ!

友達と英語を使って積極的にコミュニケーションを図ることができるように、使用する言語をできるだけ単純でわかりやすいものに絞ります。

turn left 左へまがる / turn right 右へまがる
go straight まっすぐ行く / turn round まわって
hit it うつ / go back もどって / stop とまれ

子どもの実態によっては、left / right / go / turn / back / stop などの1語による指示語で練習することもできます。

<準備する物>

- ・スイカ(ビーチボール)・手ぬぐい(タオル)
- ・棒(新聞紙2、3日分でまるめて作る)
- ・スタートライン(ガムテープ)

PROFILE

佐藤 裕子 さとう ゆうこ (船橋市立若松小学校教諭)

千葉大学大学院教育学研究科カリキュラム開発専攻で「小学校英語」指導法について学ぶ。現在は、小学校に勤務しながら、千葉大学教職大学院高度教職実践専攻において、「担任が英語を主体となって進めるための学校体制作り」を研究中である。

H25～27「外国語活動授業の達人」(千葉県教育委員会 認定)、『3語でできる！小学校の教室英語フレーズ集』(アルク)アドバイザー。

<ゲームのやり方>

- 1 ペアを組んでチームごとに並ぶ。
- 2 一人が目隠しをする。3回回ってスタート。
- 3 ペアを組んだ友達が英語で方向を指示しながらスイカのところまで連れて行く。
- 4 スイカに当たったら1ポイントになる。
- 5 交代して次の友達がチャレンジする。
全員スイカを割る方と指示する方、両方を経験する。
- 6 スイカをたくさん割ったチームが勝ち。

ルールの確認は大事です。ゲームが円滑公正に進められるように、必ずゲームの前にデモンストレーションをしながら、一つ一つ共通理解していきます。

- ・日本語で指示したら得点にならない。
- ・相手の体にさわらない。
- ・棒を振り下ろすのは1回だけ。



5. もっと話したいと思わせる工夫を

いかに正確に自分の気持ちを伝えられるか、皆必死でコミュニケーションを図っていました。授業後の感想として4人の児童の意見を紹介します。

児童A	・方向の言葉を覚えて学校でも使いたい。リスニングがとってもおもしろい。
児童B	・方向の英語が話しかけてみたらうまくできた。うれしかった。今度やる時はもっとうまくできていると思った。
児童C	・左右上下かんぺき！レフト、ライト、ゴー、バックなど勉強にもなった。楽しく覚えるっていいね。
児童D	・私が指示する時はできたけれど自分がスイカを割る時はあまりうまくできなくてくやしかったです。 友だちにも「もう少し右へ行って」の「もう少し」の言葉が言えたらもっとよかったなと思いました。

感想からもわかるようにゲームが進むうちに児童に新たな問題が生じました。日本語でスイカわりをする時に「右に一步」や「もう少し」といった複雑な指示を出せるのに、英語だと何と言えば良いのかわからないというのです。「こう言いたいんだけど、英語では何て言うの?」という気持ちを引き出すことができるのも『スイカわりゲーム』のすばらしい点ではないでしょうか。

ここでもうひとつのしかけ(工夫)を試みます。チャレンジタイムです。グループで話し合い、あと一つ指示語としてどんな言葉を付け足したらよいか考えさせるのです。よりスイカを割るために伝えたい言葉は何か、みんな真剣に考え、ALTから教えてもらった英語を使って必死にコミュニケーションを取ることでしょう。

何よりもスイカを打つことができた時の児童はとてうれしそうでした。待っている児童も早く順番が来ないかな、やりたいなと話していました。児童が心から楽しみ気持ちを伝えたいと思わせるような活動を充実させることが大切であると考えます。

6. おわりに

「主体的・対話的で深い学び」が、次期学習指導要領のキーワードになっています。学ぶことに興味や関心を持ち、見通しを持って自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的・対話的で深い学び」を目指すとするならば、『スイカわりゲーム』では、自分たちでゲームの方法やルールを考えさせたり、ゲームの途中で出てきた課題を解決しながら取り組むのも主体的で深い学びにつながっていくのではないのでしょうか。ぜひ、チャレンジしてほしい活動のひとつです。

【引用・参考文献】

田中博之(2017)『実践事例でわかる！アクティブ・ラーニングの学習評価』学陽書房

英語のお姉さんたち小学校へ！

～教えることを通した学びのプログラム～

狩野 晶子 (上智大学短期大学部 英語科・准教授)

1. 短大生がオールイングリッシュで

“Hi!” “Hello!” ここは神奈川県秦野市内のとある公立小学校。お揃いのベストを着た「お姉さんたち」が現れると、玄関や廊下で行きかう児童らと、英語でのやり取りがはじまります。やってきたのは神奈川県秦野市にキャンパスのある上智大学短期大学部英語科で児童英語教育を学ぶ学生たちです。

今日は3校時目に3年生、4校時目は4年生。各教室に学生数名のチームで入り担任の先生が見守る中、英語のみで45分の授業を行います。レッスンプランはオリジナルのもの。教材や教具もすべて学生の手作りです。チームの中でメインの指導役とサポート役というように分担を決め、ティームティーチング形式での授業です。子どもたちが楽しく自然に英語を使えるように、様々なアクティビティを組み合わせたコミュニケーション的な内容のレッスンプランとなっています。



学生たちはテンポよく、にこやかにオールイングリッシュでのレッスンを進めていきます。英語だけで初めは不安そうだった児童たちもすぐに慣れ、積極的に手を挙げたり声を出したりして参加してくれます。児童も学生もにぎやかに、笑顔でたくさん英語のやり取りが聞かれます。担任の先生も児童と一緒に声を出し

たり活動に参加しながら、授業方法の気付きや学びがたくさんあったようです。今日の授業は大成功！

でも、実はこの授業がうまくいくためには、「準備」や「練習」や「仕掛け」や「工夫」が山ほど必要です。このような活動が成立する背景とは？そしてどのような学生たちの汗と涙の苦勞が隠れているのでしょうか。

2. 地道な準備と練習あってこそ

この公立小学校での授業ボランティア活動は短期大学部と秦野市との連携のもと「イングリッシュフレンド(EF)」と名付けられ、およそ10年にわたって続いてきました。EF活動に参加する学生たちは、児童英語教育や第二言語習得関連の前提科目を修了し、理論のベースをきちんと持って実践に取り組みます。「児童英語教育演習」というEF活動と連動した正課科目を履修し、そこでレッスンプランの作り方や指導の実践練習をします。

小学校でのより良い英語授業をするには、多くの準備と練習が必要です。英語の発音やティーチャートークも英語科だから楽々というわけではありません。発音は小学校に行く前に全員で何回も何回も復唱します。どの部分を強く言うかだけでなく、どの音をどのように注意し発音するか、日本語の音との違いをしっかりと意識しながら繰り返し練習します。指示の英語や褒める表現も、ジェスチャーを添えて表情豊かに言えるようにペアになって何回も練習します。まるで中高生の部活のようなフィジカルなトレーニングです。このような基礎練習を通して、学生は英語だけでわかりやすく伝えるにはどうしたらいいか、ということをもっと学びます。

PROFILE

狩野 晶子 かの あきこ (上智大学短期大学部 英語科 准教授)

小学校英語指導者認定協議会(J-SHINE) 理事、指導者育成トレーナー。児童英語教育学会(JASTEC) 関東支部運営委員。英語授業研究会 理事、関東支部事務局長。専門は第二言語習得、早期英語教育。近年はとくに児童英語、小学校英語の分野での実践、研究を進め小学校での英語指導、実践研修に携わる。英語教育に関する著書に加え、辞書や教材など多数執筆。近著：『小学校英語教科化への対応と実践プラン』(共著・吉田研作編)教育開発研究所 2017年。



授業の題材、アクティビティの内容にも学生の工夫と苦勞があふれています。シンプルな言語活動の中でも気付きや知的好奇心を呼び起こせるように、児童の発達段階や興味関心に沿った内容となるように調べ、試行錯誤を繰り返します。例えばテーマが「速さ比べ」の時は人気アニメでの「空飛ぶ魔法のじゅうたん」や「タケコプター」の速さをインターネットなどで調べて取り入れました。ゾウの走る速さとマグロの泳ぐ速さを比べたり、枠にとらわれない発想で、児童の反応を見ながら改善を繰り返し、試行錯誤を経てレスンプランが完成します。さらにグループでの話し合いや発表など、仲間との関わり合いも小学校ならではの欠かせない要素です。小学生ならではの学びにこだわって作るレスンプランが、結果的には他教科連携や内容言語統合学習(CLIL)ともつながる広がりや深みのある内容になっていきます。

3. 指導者養成や研修への示唆

小学校の現場を体験すると、実際に教えるに際して大切なのは英語力よりむしろクラスマネジメント力や、児童をよく知っていることだと学生は気付きます。担任の先生にどう関わっていただくか、どう巻き込むか、

多様な児童にどう対応するか、学生の試行錯誤は続きます。

それは逆に、学生の指導とプログラムの監督にあたる私(狩野)の立場から見ると、貴重な具体的なノウハウの蓄積にほかなりません。そのような地道な失敗を経た実践の取り組み一つ一つが、小学校で英語を指導する上で必要なスキルと知識、そしてプラスアルファの力をどのように身に付けていくべきかを示す道筋になります。



短期大学の学生が指導する様子を見ることで、担任の先生方も多くの学びがあるとの嬉しいお声をたくさんいただきます。子どもたちの様子を見るなかで「こんなこともできるんだ」「こんなふうにとるともつと…」など先生方も気付きや参考になる点が見つかるようです。小学校英語の指導者に求められる力とは何か、それはどのような具体的な指導やトレーニングによって築き上げ磨くことが可能なのか、日々の実践が即ち学びです。

啓林館のおすすめ教材

理数の啓林館だからこそできた、英語の読みもの！ KEIRINKAN Science Readers

サイエンスリーダーズ

理科の題材を通して
英語を学ぶことができる
啓林館ならではの商品です。
身近な自然やいきものの
迫力ある写真とともに、
英語を楽しく学べます。

授業ですぐ使える
しくみがいっぱい！



「Science Readers 1巻, 2巻, 3巻」

<各巻>

定価 1,500円(税別)

仕様 B4判/オールカラー/12ページ

付録 CD-ROM1枚

小学校

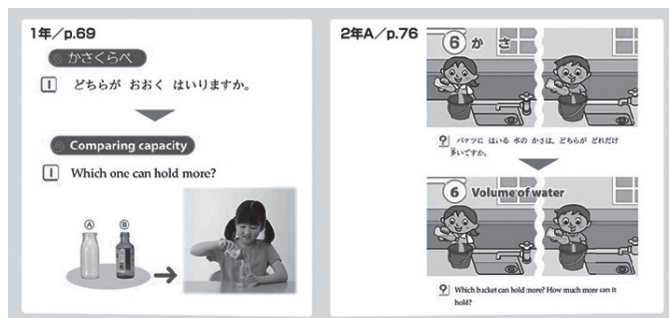
「Fun with MATH for Elementary School」

H23年度用算数教科書「わくわく算数」対応の教科書英訳版

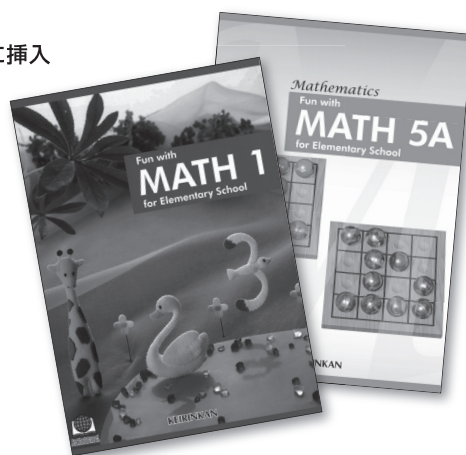
定価 各 1,500円(税別)
1年,2~6年AB(上下) 合計11冊

Point 1 児童の発達段階や算数の学習内容に応じた英訳に配慮

Point 2 日本独特の言い回しや・教材を解説した「Footnote」を本体(全巻)に挿入



例「かさ」の表現



— 知が啓く。 —
啓林館

本社 〒543-0052 大阪市天王寺区大道4丁目3番25号
東京支社 〒113-0023 東京都文京区向丘2丁目3番10号
北海道支社 〒060-0062 札幌市中央区南二条西9丁目1番2号サンケン札幌ビル1階
東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1丁目4番34号 双栄ビル2階
広島支社 〒732-0052 広島市東区光町1丁目7番11号 広島CDビル5階
九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院1丁目5番6号 ハイヒルズビル5階

電話 (06) 6779-1531
電話 (03) 3814-2151
電話 (011) 271-2022
電話 (052) 935-2585
電話 (082) 261-7246
電話 (092) 725-6677

<http://www.shinko-keirin.co.jp/>